学位（博士）論文　要旨

台湾における日系外来語について

柯　　惟　惟

広島大学大学院総合科学研究科

Japanese Loan Word in Taiwan

KE WEI-WEI

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

論文の要旨

本論文は台湾において日系外来語の意味の認識度、語の使用度、日本語由来であることを知っているかどうかを問う日系度をアンケート調査し、台湾における日系外来語の使用状況を初めて広範に明らかにした研究である。

本論文は以下の7章から成る。

第１章　序論

この章は研究動機、目的、台湾の言語諸相などについて述べる

台湾において、多くの日系外来語が大量に取り入れられ、使用されている。しかし、このような現象を記録し、調査した研究は殆どない。本論文は現在の台湾において、どんな日系外来語があるのか、どのような頻度で使用されているのか、これらの語彙が日本語由来であることを台湾の人々は認識しているのかについて明らかにしたい。なお、台湾において使用される言語には、共通語としている“國語”(中国語)の他に、最も人数の多い閩南人の閩南語、客家語、諸原住民の言語があるが、本論文はどのエスニックでも話すことができる“國語”[1](中国語)の中の日系外来語を調査する。

第２章　外来語について

この章は外来語の定義と台湾に流入した日系外来語の流入経緯について述べる。本論文は方言を経由し、“國語”(中国語)に入っている残存外来語を含め全種類の日系外来語を研究するため、広義の定義により、日本語から直接“國語”(中国語)に入った音訳、意訳、漢字借形の他に、方言を経由して入ってきた語彙や“字母詞”[2]のようなかな表記の語彙、ローマ字表記の語彙をすべて外来語として認める。

残存外来語は日本殖民地時代に閩南語に入り込み、今まで残され、文字化し、“國語”(中国語)に入ったものである。近代外来語は日本が明治維新後、西洋の近代文明を受け入れる過程で漢字を用いて作り出した沢山の新語や訳語のうち、日清戦争後に大量に中国語に流入したものである。注目したいのは、近代外来語が台湾に持ち込まれたのは1945年に中華民国が台湾に移転した時期であるということである。新日系外来語は1986年戒厳令が解除された後、再び日本と交流し始めた頃から発展してきた「哈日ブーム」と共に入ったものである。

第３章　先行研究

この章は日系外来語についての先行研究を中国と台湾に分けて検討する。

中国側には、高名凱・劉正埮(1958)、史有為(2004)、楊錫彭(2007)、台湾側には村上嘉英(1979)、姚榮松(1992)、陳麗君(2000)、鍾季儒(2003)、簡月真(2005)、顔秀珊(2008)、柯惟惟(2008)、王華南(2010)などがある。

中国語と同じく漢字を用いる日本語から流入した日系外来語を研究するには、どんな分類方法があるのかに絞り、各研究者の論点を整理した。台湾では、残存外来語、近代外来語、新日系外来語などの種類を問わず、全般的な日系外来語についての調査は殆ど行われておらず、鍾季儒(2003)のみである。ただし、鍾(2003)の調査した雑誌は二種類に過ぎないので、全面的に日系外来語の様態を捉える調査が重要であることを指摘した。

第４章　調査する日系外来語の語彙選定

この章は調査する三種類の日系外来語の語彙選定方法について述べる。

近代外来語は中国語においてすでに安定している日系外来語だと言われているため、高名凱・劉正埮(1958)が分類した日系語彙の中からランダムに11語を抽出した。

残存外来語は“國語”(中国語)に入り込んだものを調査するので、方言の音声で調査すると、回答者が方言を話しているのか、あるいは“國語”(中国語)を話しているのか弁別しにくくなる恐れがある。そのため、先行研究から文字化した残存外来語を全部取り出し、インターネットで検索し、見出し件数の多いほうから抽出した。したがって、陳麗君(2000) から4語、姚榮松(1992) から3語、顔秀珊(2008) から7語、『教育部臺灣閩南語常用詞辭典』[3]から5語、計19語の残存外来語を抽出した。

新日系外来語の先行研究は多くないので、以下のような手順で抽出する。まず、台湾行政院新聞局が公表した『出版年鑑』を調べ、普及率の高い三つの女性誌各十冊を語彙の抽出モデルにする。

1．『ViVi唯妳時尚 國際中文版』[4]、『mina米娜時尚國際中文版』[5]、『Ray瑞麗美人』[6]から日本語に由来した可能性のある語を選び出す。
2．選び出した語から先行研究が取り上げた近代外来語と残存外来語を排除する。
3．『國語日報辞典(第24版)』[7]を参考にして、辞典に載っていない語、あるいは載っているが意味が違う語を排除する。
4．『広辞苑』により、英語など日本語以外の言語由来ではない語を新日系外来語と判断する。また、広辞苑に載っていない語は語源を推定する。

語を抽出した後、雑誌での使用頻度を計算し、各表記から高い頻度の語を選択し、かな表記7語、ローマ字表記5語、漢字表記29語を取り上げた。

第５章　アンケート調査

この章はアンケート調査の各段階の説明と調査した結果及びその分析を述べる。

アンケート調査は記入漏れなどの無効票を除き、日本語学習歴のある人と人数の少ない客家語母語話者を外すと、569人になった。内訳は以下の通りである。

日系外来語の種類から結果を述べる。近代外来語は全回答者が意味を知っており、使用頻度も高く、日本語が語源であることの認識が低い。つま

表１　アンケート調査・母語と年齢層の人数

性別	母語	10代	20代	30代	40代	50代	合計
男性	中国語	15	33	11	16	13	88
	閩南語	10	15	15	16	11	67
	中国語＋閩南語	9	7	8	19	11	54
	計	**34**	**55**	**34**	**51**	**35**	**209**
女性	中国語	28	76	39	14	14	171
	閩南語	9	35	35	19	15	113
	中国語＋閩南語	13	19	18	11	15	76
	計	**50**	**130**	**92**	**44**	**44**	**360**
合計		84	185	126	95	79	**569**

り、“國語”(中国語)の中で、すでに安定している日系外来語である。

残存外来語は、方言を使わない国民党の“國語”(中国語)政策に最も影響された30代の使用度が低いことが分かった。しかし、“甜不辣(てんぷら)”のように料理名称として30代においても広く受容されているような語もあれば、“烏西(お世辞)”のように全世代において認識度[8]と使用度[9]が共に低く、受け入れられていない語もあることを明らかにした。

かな表記の新日系外来語を平均率から見ると、3割の回答者しか意味を知らないが、“の”というかな表記は9割の回答者が意味を知っており、6割の人が使用する傾向がある。つまり、日本語学習歴のない人は、かな表記は受容しにくいが、“の”というかな表記は広く受容していることが分かった。また、漢字表記の新日系外来語はサブカルチャー関係の語彙が多いので、若年層において認識度、使用度が共に高かった。

第６章　インターネット調査

この章はインターネットによる調査について説明し、調査結果について分析する。

インターネットを利用し、情報を発信する側の代表メディアである新聞サイトを調査する。また、ブログサイトは誰でもアカウントを作成し、書き込みができる。人気ブログは新聞と同じように多くの人に情報を伝達できる。情報伝達の面から見ると、まさにアンケートと新聞サイトの中間に位置している。こういう特性を持っているため、ブログサイトも調査範囲に入れる。また、台湾での使用状況のみならず、中国での使用状況も調査する。中国と比較することにより台湾での使用状況のさらに明確な特徴を捉えたい。新聞サイトは、中国の≪人民日報≫、台湾の≪自由時報≫、ブログサイトは、中国の「新浪博客」、台湾の「無名部落格」を調査した[10]。

インターネットによる台湾と中国の間に見られる日系外来語の差異は、以下のようになる。一つ目は、台湾は新聞でもブログでも中国より多くの残存外来語が使用されている。二つ目は、新日系外来語の中国の新聞での見出し件数(延べ語数)は台湾より多いが、使用される新日系外来語の数(異なり語数)は台湾のほうが多い。三つ目は、台湾の新聞ではかな表記が見出されなかったが、保守的な中国の新聞で2語が見出された。

第７章 結論

この章は調査した結果と分析のまとめについて述べる。

アンケート調査では、以下のようにそれぞれの種類の日系外来語の特徴が見られた。近代外来語は学校教育を通して広く隅々まで浸透し、誰でも意味を理解しているが、日本語由来であることは知られなくなっている。台湾特有の残存外来語は閩南語から文字化され、新聞などでも用いるようになっているものの認識度は低くない。ただし、閩南語から“國語”(中国語)に文字化する段階で使用する表記が未だに規範化されていない。どのような漢字で閩南語を文字化するのか統一されていない[11]ことは残存外来語の理解や使用に影響を与えている。この類の語彙を発音して調査すると、理解度はより高くなるだろうと考えている。

音声による日系外来語の調査を行うことができるかどうかについて今後検討したい。新日系外来語はサブカルチャー関係の語彙が多く、これまで見られなかったかな表記とローマ字表記の語彙があるのが特徴である。かな表記の語彙の認識度は低いが、意味を理解している回答者の使用度はローマ字表記の語彙とほぼ一緒である。つまり、日本語学習歴のない人がかな表記の語彙の意味を知っていれば、ローマ字表記の語彙と同じ程度に使用していることが明らかになった。

また、インターネットを通して新聞、ブログサイトでの使用状況を調査した。新聞で使われる日系外来語はブログより少ない。これは、新聞は近代外来語のような書きことばや専門ジャンルの語彙が多用され、サブカルチャー関係の一部の新日系外来語や話し言葉に近い残存外来語はあまり使用されないからであろう。そして、情報の送り手である新聞と比較するため、情報の送り手でありかつ受け手でもあるブログも調査した。ブログに

おいて、新聞で殆ど使用されないかな表記の語彙を含め、三種類の日系外来語はすべて盛んに使用されている。また、台湾では使用される日系外来語の語彙数が多いのに対して、中国は使用される日系外来語の見出し件数が多い。つまり、台湾は中国より多くの日系外来語を受け入れている。中国は受容している日系外来語はそれほど多くないが、一旦受け入れると、使用頻度は台湾より高い。

台湾は歴史や政治的な関係で、中国と違い、より多くのジャンルにわたり、豊富な日系外来語が受容されている。ただし、台湾と中国の日系外来語の受け入れ方の差異についての先行研究は殆どない。本論文は単一種類の日系外来語だけではなく、台湾の国語である「繁体字中国語」において、植民地時期から現在まで、日本から取り入れ、今もまだ使われている三種類の日系外来語を全て調査対象とし、認識度、使用度、日系度について、アンケート調査を行い、さらに、インターネットを通じ、新聞での使用とブログでの使用特性と中国との差を捉えた。

台湾において、この長期間にわたって受容されてきた日系外来語の様態を明らかにできたことが本研究の成果であり、本研究が今後の台湾の日系外来語研究の一助となれば幸いである。

脚注

1 一部の原住民や本省人の年寄りの中には社会と接触することがなく、家族としか接触しない生活をしているために、“國語”(中国語)ができないという人が実際に存在するが、極めて少数である。

2 史有為(2004)『外來詞 異文化的使者』上海辭書出版276-289頁。

3 『教育部臺灣閩南語常用詞辭典』http://twblg.dict.edu.tw/holodict_new/index.html(2012年3月20日アクセス)

4 『ViVi唯妳 時尚國際中文版 30-39号』(2008年9月-2009年6月)青文出版社

5 『mina米娜時尚國際中文版 66-75号』(2008年7月-2009年4月)青文出版社

6 『Ray瑞麗美人 62-71号』(2008年6月-2009年3月)檸檬樹出版

7 何容主編(1984)『國語日報辭典』(第24版)國語日報

8 認識度とは、語彙の意味を知っている割合である。

9 使用度とは、「よく使用する」と「時々使用する」を加算した割合である。

10 調査時点は2012年6月13日である。

11 現在、台湾において閩南語を研究する時は“臺羅拼音”という音声を表す表記を使うのが一般的であるが、本論文で取り上げた先行研究のような漢字表記のほうが一般の人に理解できるのが現状である。